

ヤコブ書5章12-20節 「祈りによるつながり」

1A 誓うことへの戒め 12

2A 罪の赦しによる癒し 13-18

1B 苦しみの時 13

2B 病気の人 14-15

3B 祈りの力 16-18

3A 罪から救う働き 19-20

アウトライン

ヤコブ書5章を開いてください、私たちはついにヤコブ書の最後の学びになります。12 節から読んでいきますが、前回の学びにおいて私たちは、ヤコブの手紙の中心的内容になる部分を読みました。それは、苦しみの中であっても、主が来られるのが間近なので、耐え忍びなさいという勧めです。「こういうわけですから、兄弟たち、主が来られる時まで耐え忍びなさい。(5:7)」そして、耐え忍んでいる人の模範として、ヤコブはヨブを取り上げました。12 節からは、この手紙を終えるに当たって、ヤコブが具体的な実践のための勧めを行っていきます。

1A 誓うことへの戒め 12

12 私の兄弟たちよ。何よりもまず、誓わないようにしなさい。天をさしても地をさしても、そのほかの何をさしてもです。ただ、「はい。」を「はい。」、「いいえ。」を「いいえ。」としなさい。それは、あなたがたが、さばきに会わないためです。

12 節は話の続きです。「何よりもまず」とヤコブは言っています。主の来臨を思って、苦しみの中であっても耐え忍んでいく中において、何よりもまず、誓わないようにしなさいと勧めています。誓うとはどういうことでしょうか？自分の言ったことを果たすことです。自分の言った通りに責任を果たして行なう、ということです。けれども、多くの場合、自分の言っていることを行なわない、という問題があります。ですから、何やらかにやら話すのではなく、主から命じられたことについて、「はい」と言って応答しなさい、ということです。そして、もし主の命令に違反していることをしているのなら、「主よ、私はこの命令に従っていませんでした。」と、「いいえ」と言いなさい、と言っています。

ヤコブはここで、イエス様の命令を思い出しながら書いています(マタイ 5:33-37)。当時のユダヤ教徒は、神の名によって誓うことには縛られているが、天や地を指して誓っていることは縛られていない、ゆえにその誓いから解かれると教えていました。それでイエス様は、ここでヤコブが言及しているように、「天をさしても地をさしても、そのほかの何をさしても」誓ってはならないと言われました。

ヤコブはここで、手紙全体の中で強調している、「行ないのない信仰」に対して戒めを与えているのです。「言っている」ことが信仰なのではなく、聞いて応答していることが信仰であります。ですから、信仰には必ず行いが伴います。そうではなく、言葉だけで信じているような生活は、そこに実体がなく主の裁きの対象となります。5章9節では、つぶやき合っていると、さばきの主が戸口に立っておられるとありました。イエス様もこう言われました。「マタイ7:22-23 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」主よ、と言ってはいるのですが、行なっていることは不法だったのです。

2A 罪の赦しによる癒し 13-18

私たちが主の再臨を待っているにあたって、また苦しみを耐え忍んでいるに当たって、キリスト者として何をしなければならないのか？それは、13節からの言葉を読んできますと、「祈りなさい」ということです。神に対して、祈りをもって応答します。その中で私たちの苦しみを知ってください。そして私たちが苦しみと嘆きから引き上げてくださいます。

1B 苦しみの時 13

13 あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。喜んでいる人がいますか。その人は賛美しなさい。

苦しみの中にいるとき、祈ります。私たちは苦しむ時に、つぶやいたり、兄弟の悪口を言ってみたり、軽々しく誓ったりする誘惑があります。しかし、苦しむ時の応答は、神に対して祈ることです。私たちはヨブ記の学びを終えて、詩篇の学びに今、入りました。確かに私たちには試練や困難が付き物です。自分は大丈夫だと思っても、実はそうではありません。ですから、困難のあるこの世において、私たちキリスト者の間では祈りがますます盛んになることが、苦しみから救われる道となります。

そして、自分の霊が喜びに支えられることもあります。そこでも、有頂天になったり、自分を高ぶらせたりするのはなく、素直に神に栄光をお返しする、賛美をすることです。苦しい時には祈り、喜ぶ時には賛美することによって、私たちの霊は神の前にへりくだることができます。

2B 病気の人 14-15

14 あなたがたのうちに病気の人がいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。15a 信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。

ヤコブは、苦しみの中にいる人の中でも病の人たちに焦点を当てます。イエスが、この地上で宣

教の働きを行われた時に、それは貧しい者に対する福音であると言われました。それから、傷ついた者を癒すという預言者の言葉を実践しておられました。そこでヤコブは、キリスト者の共同体は、互いに祈り、苦しみの中で祈り、そして病のある人々のために祈ることによって、キリストがそこにおられるのだ、キリストの臨在を知るためには弱い人、病の人と共にいることなのだ、と書いていたのだと思います。

ヤコブは、具体的に病気の人がどのように祈られるべきか、その指導を与えています。第一に、「招く」ことです。イエスが病の人を癒された時に、その多くが自らイエスのところに来て、癒しを求めました。ベテスダの池の足なえの男など、イエス様が近づかれた場合もありますが、多くがイエス様に近づいていきました。多くの人々が、教会において牧者や長老が自分のところに来てくれることを待っています。「なぜ、うちの教会の牧師は祈ってくれないのか。」と言う人もいます。しかし、癒しのための祈りは、その人が癒しのために祈られたいという強い願いがあって、初めて成り立つものです。

私は先週、面白いお願いを新しく信じた人々にしました。一つは、「私の腕を掴んでください。」私がいくら忙しそうにしている、遠慮をしないで尋ねたり、祈りの要請をしてくださいということです。もう一つは、「占有しないでください」ということです。祈りを願う人は他にもいるかもしれないので、ずっと話そうとしないでくださいということをお願いしました。

そして第二に、癒しのための祈りの時は複数の教会指導者がいるということです。新改訳は正しく訳しています、「教会の長老たちを招き」と、長老が一人ではなく二人以上いるのです。私たちがカルバリーチャペル・コスタメサの教会にいた時に、「長老たちによる祈り」という小さな集まりがありました。長老の方が必ず二人、病のある人のためにオリーブ油をつけて祈ります。私の妻は、指を包丁で深く切って、それが完全に直っていなかったので、祈ってもらったら、家に帰る途中で直りました。その時について子供も与えられるように祈ってもらったのですが、妊娠しました。残念なことに流産になりましたが、胎も癒しを受けたのです。

なぜ、二人以上なのかということをお考えすると、ある人は、「神の栄光が祈った人に与えられないため」と言いました。なるほど、と思いました。癒すのは神なのですが、私たち人間は弱い者で、その器をあがめてしまうのです。ペテロとヨハネが、神殿の敷地にいた生まれつきの足なえの男を立てた後、そこにいた人々が集まってきた彼らをじっと見つめたのです。それでペテロは、「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。(使徒 3:12)」と言いました。ペテロが癒したのではなく、イエスの名が癒したのだと言いました。

そして、「オリーブ油」を塗ることについてですが、旧約の時代はオリーブ油が病の治療にも使われていたことを伺うことができます。また、油がゼカリヤ書 4 章の燭台の幻にあるように、神の

御霊を象徴していることも知っています。したがって、聖霊の分け与えてくださる賜物として、癒しの賜物がありますが、それを象徴しているので、信仰によって癒しを求める時に使うのです。私たちの教会にも、オリーブ油の瓶を用意しております。

そして、「信仰による祈りは、病む人を回復させます。」とあります。ここでの「信仰」は、賜物としての信仰です。私たちは信じて祈ります。これは神の命令です、ヤコブもこの手紙の初めに、「少しも疑わずに、信じて願いなさい。(1:6)」と言いました。そしてイエス様は何度も、「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。」と言われました。ですから、信仰をもって神に近づきます。

しかし、「信仰の賜物」というものが、コリント第一 12 章に列挙されています。信じなければいけないのですが、信じることも賜物として与えられるということです。ルステラにおいて、パウロが福音を語っていると、生まれつき足なえの男が聞いていました。そしてこう書いてあります。「パウロは彼に目を留め、いやされる信仰があるのを見て、大声で、『自分の足で、まっすぐに立ちなさい。』と言った。(使徒 14:9-1)」とあります。私たちも、この信仰の賜物を求めましょう。「癒されるのだ」という信仰が与えられるのです。

そして、「主はその人を立たせてくださいます。」とヤコブは繰り返し強調しています。これは、イエス様が足なえを起き上がらせてくださったこと、また使徒たちも同じように、イエスの御名によって立たせたことを思い起こさせます。そして、これは復活の力も思い起こさせます。墓に葬られているのに、神がイエスを立たせました。この復活の力が、聖霊によって私たちの内に働き、そして病が癒されるのです。

ここで気をつけなければいけないのは、全ての病人が癒された訳ではないことです。使徒時代でさえ、全ての人が癒されませんでした。使徒パウロ自身が、コリント第二 12 章で、自分の肉体に与えられたサタンからの棘について、キリストの恵みによって生きるために、それが取り除かれなかったことを告白しています。そのことを知るための鍵となる聖句が、ローマ 8 章 23 節です。「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしてください。すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」御霊の賜物の初穂を受けている、とあります。被造物が贖われる時が来るまで、御霊の現れの全てを見ることはありません。その前触れを見ているのみです。したがって、主が戻ってこられた神の国では全ての人が癒されていますが、それまでは癒される人も、そうでない人もいます。

3B 祈りの力 16-18

15b また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。16a ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。

病のための祈りは、罪を言い表す祈りと関連づけて話されています。これもまた、イエス様の宣

教の働きに見ることができるものでした。中風の者が運び込まれた時に、「あなたの罪は赦されました。」とイエス様は宣言されました。ベテスダの池で足が直った男にも、「罪を犯さないようにしなさい」と言われました。したがって、霊的に癒されるということと、肉体の癒しというのが関連している時があります。

イザヤ書 53 章の預言について話します。「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(5 節)」イエス様は肉体の傷を負われました。それは、罪というものが私たちに傷をもたらすという考えに基づくものでした。心に傷を受けるだけでなく、人全体に対して、肉体も含めて傷を負うことになるということです。そこで、罪を犯したその霊的な傷に対して、イエス様は肉体の傷を受けることによって、霊的な癒しも、そして肉体の癒しも与えられます。この預言の言葉は、肉体の癒しにも霊的な癒しにもどちらにも使われます(マタイ 8:17、1ペテロ 3:18)。

そしてヤコブがここで焦点を当てているのは、イエス様の言われた「あわれむ者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。」という御言葉です。これまで、兄弟が仲間を裁くことについて、また心の中で差別をすることについて強い戒めを与えました。貧しい者に対する心遣いを示しました。キリスト者の交わりが、弱まった人々、そして罪を犯してしまった人々に対して、癒しを与えるためのイエスの働きが行われる所だということなのです。ですから、そのような人を受け入れるという雰囲気があって、それで互いに罪を言い表し、それで互いのために祈るようにしなさいと命じています。

これは、御霊が働かれた時に行うことができます。そして思慮深く行わなければいけません。罪を犯したことを公に告げても、その具体的なところまで話さなくてよい場合がほとんどです。なぜなら、それを悪魔が掴み取って、噂をしてみたり、新たな兄弟への悪口を言わせるきっかけとさえなるからです。けれども、聖霊が働き、兄弟に自分の悩みや苦しみ、その罪を打ち明けるのであれば、深い憐れみをもって祈る時に、そこに罪の赦しがあるし、また病の回復があります。私たちの群れでは、しばしばアフター・グローという集会で、そのことを行ないます。

16b 義人の祈りは働くと、大きな力があります。17 エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。18 そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を実らせました。

祈りの力についての励ましです。「義人の祈り」とありますが、それは私たちが考えるような義人のことではありません。例として出しているエリヤは、私たちと同じような人と書いてあり、実に彼は落ち込んで自殺願望まで出てきた人でした。そうではなく、キリストという義にしっかりと拠り頼んでいる人、ということです。自分自身に頼らず、キリストのみを自分の正しさとし、この方の知恵と力によって生きている人のことです。

ヤコブは、祈りの力についてエリヤを取り上げています。今、お話ししましたように大事なのは、「私たちと同じような人」だということです。今、エリヤが現代にタイム・スリップして、現代人の服装をさせたら、彼がそのような偉大な、大きな働きをしたのか分からないと思わせるような外見でありましょう。彼は私たちと全く同じ、喜怒哀楽を持っている人であり、普通の人だったのです。ですからヤコブが強調しているのは、私たちが高度な霊的状态に達するから祈りが聞かれるのではない、ということなのです。祈りの特権は、信じる者すべてに与えられるのです。

私がスクール・オブ・ミニストリーに通っていた時に、ベトナム系アメリカ人の兄弟がいました。彼は霊的にきちんとしていなかった時に、自分が祈って大きな癒しを経験した人のことを話していました。その時に自分ではなくて、イエス様の名前の力なのだと悟って、神に立ち戻ったということでした。

けれども大事なのは、熱心に祈ることです。エリヤの祈りが聞かれたのは、雨が降らないことについては言及されていませんが、雨が再び降る時には七度の祈りで、ようやくその兆しが見えたということです。バアルの預言者との対決の後、彼はアハブに言いました。「それから、エリヤはアハブに言った。「上って行って飲み食いしなさい。激しい大雨の音がするから。」そこで、アハブは飲み食いするために上って行った。エリヤはカルメル山の頂上に登り、地にひざまずいて自分の顔をひざの間にうずめた。それから、彼は若い者に言った。「さあ、上って行って、海のほうを見てくれ。」若い者は上って、見て来て、「何もありません。」と言った。すると、エリヤが言った。「七たびくり返しなさい。」七度目に彼は、「あれ。人の手のひらほどの小さな雲が海から上っています。」と言った。それでエリヤは言った。「上って行って、アハブに言いなさい。『大雨に閉じ込められないうちに、車を整えて下って行きなさい。』」しばらくすると、空は濃い雲と風で暗くなり、やがて激しい大雨となった。アハブは車に乗ってイズレエルへ行った。(列王記第一 18:41-45)」ひざの間に頭を入れて祈って、その結果をなんと七度も若者に見に行かせました。そしてようやくのこと、ほんの少し雲が見えたのです。それを信仰をもって大雨が降る、としたのです。

私たちは今、詩篇を学んでいますが、そこでもしつこい程の嘆願の祈りを見ることができます。そしてイエス様も、不正の裁判官のところに来たやもめの例えを出して、ましてや正義の神は、選民たちの祈りを聞かない訳がない、と言われました。

3A 罪から救う働き 19-20

そしてヤコブは最後に、罪に陥った者たちを助ける働きをすることを勧めます。

19 私の兄弟たち。あなたがたのうちに、真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すようなことがあれば、5:20 罪人を迷いの道から引き戻す者は、罪人のたましいを死から救い出し、また、多くの罪をおおうのだということを、あなたがたは知っていないさい。

ヤコブの手紙は、その表面だけ読むと、私たちを責める、厳格な書物に見えます。ある人たちはそうかもしれません。確かに厳しさがありますが、それは自分が正しいとする、ちょうどパリサイ人たちが陥った過ちを犯している人には厳しい言葉なのです。弱っている者への憐れみ、貧しい者たちの幸い、隣人を自分自身のように愛すること、そして行いの伴ったところの言葉、言葉だけが遊離して軽々しい誓いをしていない姿、こういった憐れみの共同体がイエス・キリストの福音であり、むしろヤコブの手紙はそうしたキリストの愛の実践を強調しているのです。

「真理から迷い出た者」とあります。イエス・キリストの真理から迷い出る時に、もちろん行ないにおいても迷い出ます。罪を犯し、罪の生活に入っていきます。教会ではしばしば、二つの極端が行われますが、罪はそのまま良いのだ受け入れなければいけない、とする側と、罪を犯したのだから交わりから離れなさい、と言って、なんら霊的な回復やリハビリテーションを用意していない側のどちらかなのです。しかし、聖書は罪を犯し続けている者は交わりから外し、しかしそれを外すのは神の聖さのためであると同時に、その人が立ち返るためであります。

そのために必要なのは、「連れ戻す」ということです。ガラテヤ 6 章にも同じことが書かれています。「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。(ガラテヤ 6:1-2)」柔和な心が必要です。そこには、自分自身も誘惑に陥るという前提があるので、憐れみの心を持つことができます。そして重荷を持つのです。これが隣人を愛する、つまりキリストの律法を全うすることです。

それを行なうと、20 節にあるように、二つのことを達成することができます。「罪人のたましいを死から救い出」すとあります。これは、罪を犯し続けて、その人が救いの中に入ったほか分からないほど、罪の中の生活に留まって死に絶えるのではなく、確かに救われていることを確かなものとするということを意味します。パウロが、近親相姦の罪を犯した男についてこう言いました。「このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。(1コリント 5:5)」主が戻ってこられる日に、その霊が救われるのです。

そして、もう一つは「多くの罪をおおう」ことです。使徒ペテロも言いました。「何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。(ペテロの手紙第一 4:8)」これは罪を隠すことではありません。罪を犯した後に、悔い改めた者についてのその罪を、思い出さないということです。このような愛の共同体があれば、私たちは何と幸いなことでしょうか！過去の罪が問われないのです、けれども神の恵みによって、その罪はもう犯したくないと悔い改めています。だからだれをも裁けず、ただキリストのみを愛して、キリストをあがめることを喜びとしています。そして、主が戻ってこられる時まで慎み深くしており、忍耐しているのです。祈りあって、そして共に讚美し、祈ります。このような共同体が私たちの教会にも実現しますように。